

仏道における「よこさま」の表現にかかわって、親鸞は「縦(たて)」と「横(よこ)」という区別を語る。「他力」や「本願力」が「横」と表現されるのに対して、私たち自身のありようは「よこさま」でも「縦」的なのだと。「思いも及ばないところから」や「つる横からの方向に対して、縦とはつまり、「私」を中心に世界の出来事が直線的に結び付き、見通しがはっきりと立っている」といふことだ。想定されたものなから、私たちは前へ前へと突き進む。

原発をめぐる状況についての、「完全にコントロールされている」といった発言がそのよい例だ。原子力という技術が実際に人間の手に負えるものかどうかはさておき、これを言葉とおりに信じる人はいないだろう。こうした発言から浮かび上がってくるのは、何より自分自身すら満足にコントロールできない私たちの姿である。一時繰り返された「想定外」という言葉は、私たち自身に根づいた「縦」的な生きざまを思い知らせるものだったが、それを再び私たちは「想定内」という幻想で覆い隠そうとしている。横(よこ)過ぎれば熱さを忘れ、結果として同じ苦しみは何度も味わわねばならない。執着の根を横取りに、根こそぎ断ち切るようならばたつきを本心に望んでいるのは、実は私たち自身なのではないか。

(元研究員 内記 洗)

『尊号真像銘文』試訳 ⑨

現代語

「横截五悪趣 悪趣自然閉」の、「横」は「よこさま」ということです。よこさまとは、阿彌陀如来の願いのほたらきを信じるということであって、私たち自身の思いはからいや想定が破られるということ。『五悪趣』や『四生』といった言葉が示しているように、私たちは誰もが生まれ育った環境に縛られ、これまで自分がしてきたことに振り回されながら生きています。そうした生きざまを、自らの意志でどうしようというのではなく、如来の願いのほたらきのもとに断ち切り、そこからひとりで離れることになる、ということ。「横」というのです。これを「他力」と呼び、「横超」と言います。「横」は「縦」——「たごさま」——に対する言葉、「超」は「迂」——「めぐる」——に対する言葉です。この「縦」と「迂」とは、それぞれの努力によって「仏のさとりに」到達しようとするあり方——つまり、自分の足で一步一步、真実に近づいていこうとか、気の遠くなるような長い時間をかけてでもこの世の苦しみを乗り越えていこうという「自力」の歩み——を表すものです。一方、「横超」とは、「他力」という真実の教えの根幹なのです。「截」というのは、きる、ということで、絶えることなく繰り返される「苦」の連鎖を「よこさま」に断ち切るのです。「悪趣自然閉」とは、如来の願いに命を賭けて応えずにはいられない、という心が起こるとき、果てしなく続いてきた迷い苦しみの連鎖が閉じるため、「自然閉」というのです。「閉」です。から、閉じるのです。迷いの世界を破ろうという阿彌陀の願いに導かれて、私たちのこの身がそっくりそのまま、おのずと生まれ変わるのです。

【注】「五悪趣」とは、三悪趣(「地獄」、「餓鬼」、「畜生」)に「人」と「天」を加えた五つのあり方を指す(後出の「五道生死」も同じ)。これに「修羅」を加えて「六道」とも言うが、いずれも生まれ変わりに死に変わり、流転輪廻し止むことのない、我々の苦しみの生の全体を表現する言葉である。また「四生」とは、胎生、卵生、湿生、化生の四種の生まれのことで、生まれ来るものすべてを表す。これら、人間として生まれ、生きていくという中で決して逃れることのできない諸条件を「超える」のである。

(訳：親鸞仏教センター)

原文

「横截五悪趣 悪趣自然閉」
「横截五悪趣」は「よこさま」ということ。よこさまとは、阿彌陀如来の願いのほたらきを信じるということであって、私たち自身の思いはからいや想定が破られるということ。『五悪趣』や『四生』といった言葉が示しているように、私たちは誰もが生まれ育った環境に縛られ、これまで自分がしてきたことに振り回されながら生きています。そうした生きざまを、自らの意志でどうしようというのではなく、如来の願いのほたらきのもとに断ち切り、そこからひとりで離れることになる、ということ。「横」というのです。これを「他力」と呼び、「横超」と言います。「横」は「縦」——「たごさま」——に対する言葉、「超」は「迂」——「めぐる」——に対する言葉です。この「縦」と「迂」とは、それぞれの努力によって「仏のさとりに」到達しようとするあり方——つまり、自分の足で一步一步、真実に近づいていこうとか、気の遠くなるような長い時間をかけてでもこの世の苦しみを乗り越えていこうという「自力」の歩み——を表すものです。一方、「横超」とは、「他力」という真実の教えの根幹なのです。「截」というのは、きる、ということで、絶えることなく繰り返される「苦」の連鎖を「よこさま」に断ち切るのです。「悪趣自然閉」とは、如来の願いに命を賭けて応えずにはいられない、という心が起こるとき、果てしなく続いてきた迷い苦しみの連鎖が閉じるため、「自然閉」というのです。「閉」です。から、閉じるのです。迷いの世界を破ろうという阿彌陀の願いに導かれて、私たちのこの身がそっくりそのまま、おのずと生まれ変わるのです。

(『真宗聖典』五一四頁)

■参考

(真はすべて「真宗聖典」)

◆「横超」——他力真宗の本意 〇「堅」、「迂」——自力聖道のところ

・道俗時衆等、おのおの無上心を受せども、生死はなほた厭いがたく、仏法また欣いがたし。共に金剛の志を榮して、横に四流を超越せよ。正しく金剛心を受け、一念に相応して後、果、涅槃を得ん者と云えり。

・「横超断四流」と言うは、「横超」は、堅超・堅出に對し、「超」は迂に對し回に對するの言なり。「堅超」は、大乘真実の教なり。「堅出」は、大乘方便の教、一乘・三乘迂回の教なり。「横超」は、すなわち願成就一実田滿の真教、真宗これなり。また「横出」あり、すなわち三乘・九品、定教の教、化土・憍慢、迂回の善なり。大願清淨の願土には、品位階次を云わず、一念願成の願に速やかに疾く無上正真道を超越す、かゝるがゆゑに「横超」といふなり。

・おおよそ一代の教について、この界の中にして入聖得果するを「聖道門」とも名づく、「横行」と云えり。この門の中について、大小、漸頓、一乘・二乘・三乘、權實、顯密、堅出、堅超あり。すなわちこれ自力、利他教化地、方便權門の道路なり。安樂淨刹にして入聖得果

するを「淨土門」とも名づく、「易行道」と云えり。この門の中について、横出・横超、假・真、漸・頓、助・正・難行・難修・難修あるなり。……「横超」とは、本願を兼念して自力の心を離るる、これを「横超他力」とも名づくもなり。これすなわち專の中の專、教の中の教、真の中の真、衆の中の一衆なり、これすなわち真宗なり。

◆「横」——五道生死をとす
・「言所無者」というは、すなわち壽命ともうすみことばなり。壽命はすなわち救護・亦陀二尊の壽命に於いて、めしにかなうともうすことばなり。このゆゑに「即是壽命」とのたまえり。「亦是是願回向之義」といふは、二尊のめしにしたこうて安樂淨刹にうまれんとわがうところなりとのたまえりなり。

◆「横」——五道生死をとす
・よく三有繋縛の城を出で、よく二十五有の門を開す。よく真実願土を得しめ、よく邪正の道路を弁す。よく愚痴海を過かして、よく願海に流入せしむ。(二〇二頁「教行信証」(行巻))